

忍ぶ川

三浦哲郎



三浦文学の原点をなす感動の名

読書ネットワーク
Part 5
復刊'83

YS "新潮社のハードカバー"

さまざまな傷痕を背負った男
が結ばれるまで……。深川情
を背景に、香り高い抒情でつ
る芥川賞受賞の表題作、他五

三浦哲郎



新潮社版

忍 ぶ 川

定価1100円

昭和三十六年三月五日 発行
昭和五十八年八月二十日 二十三刷

著 者 三 浦 哲 郎

発 行 者 佐 藤 亮 一

印 刷 所 二光印刷株式会社

製 本 所 加藤製本株式会社

発 行 所 株式会社新 潮 社
〒102 東京都新宿区矢来町七一

電話 業務 〇三(286)五一一一
編集 〇三(286)五四一一
振替 東京 四一八〇八番

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Tetsuo Miura, 1961 Printed in Japan

ISBN4-10-320911-9 C0093

忍

ぶ

川

目次

忍ぶ川……………五

十五歳の周囲……………三

ブンペと湯の花……………八

風船座……………三

恥の譜……………二

村の災難……………九

あとがき……………三七

装
幀

赤
坂
三
好

忍

ぶ

川

志乃をつれて、深川へいった。識りあつて、まだまもないころのことである。

深川は、志乃が生まれた土地である。深川に生まれ、十二のとしまでそこで育った、いわば深川ッ子を深川へ、去年の春、東北の片隅から東京へてきたばかりの私が、つれてゆくというのもおかしかつたが、志乃は終戦の前年の夏、栃木へ疎開して、それきり、むかしの影もとどめぬまでに焼きはらわれたという深川の町を、いちどもみていなかったのにひきかえ、ぼつと出の私は、月に二三度、多いときには日曜ごとに、深川をあるきまわるならわしで、私にとって深川は、毎日朝夕往復する学校までの道筋をのぞけば、東京じゅうでもっともなじみの街になっていた。

錦糸堀から深川を経て、東京駅へかよう電車が、洲崎の運河につきあたつて直角に折れる曲り角、深川東陽公園前で電車をおりると、志乃は、あたりの空気を嗅ぐように、背のびして街をながめわたした。七月の、晴れて、あつい日だった。照りつけるつよい陽にあぶられて、バラック建てのひくい屋並をつらねた街々は、白い埃と陽炎をあげてくすぶっていた。

「あああ、すっかり変っちゃって。まるで、知らない町へきたみたい。おぼえているのは、あの

学校だけですわ。」

志乃は、ころほそげにそういつて、通りのむこうの、焼けただれたコンクリートの肌を陽にさらしている三階建ての建物を指さしてみせた。志乃はその学校に、五年、かよった。

「大丈夫だよ。あるいているうちに、だんだんわかるさ。あんたが生まれた土地だもの。」

私がいうと、志乃はわらって、

「そうね。いくらなんでも、道まで変っていないでしょうから。」それからまた、焼けた学校に目をもどして、「だけど、あたしね、どこもかしこも焼けたことはきいて、しってたんですけど、あの学校が焼けたことだけは、どうしても想像できなかったの。コンクリートの建物がほうほう焼けるなんて、とても信じられなかったんです。それが、さっきひと目みたなり、ああ、やっぱり焼けたんだとあっけなくわかつちやいました。あの窓のせいなんですわ。コンクリートの建物が焼けるって、窓という窓が、のこらず黒くなることなんですわねえ。」

ひとつ、思いがけない発見をしたかのように、きれながの、すこし眼尻のつりあがった目をしばたたきながら、輪郭が焼け崩れたまま蜂の巣のようにひしめきあっている黒い窓々をながめわたすのを見て、こんどは、私がわらっていった。

「そう、いちいちひつかかっていたら、時間がいくらあってもたりないよ。」

志乃は首をすくめた。

「それじゃ、御案内ねがいます。どっちがちかいかしら。」

「ぼくは、木場。」

「あたしは、洲崎。」

洲崎はたしか、運河を越えたむこうの街で、それでは木場からあるいてみよう、私と志乃は、陽炎の踊る電車通りをよこぎって、志乃の母校の建物の裾、道のへりに落ちている浅くほそながい翳のなかを、木場の貯水池の方へあるいていった。

志乃は、もはや帰ってきはない私の兄を、私が最後にみた場所へ、いつてみたいというのであった。そうして、ついでに志乃が生まれて育った土地を、私にみせたいというのであった。

木場は、木と運河の町である。いついってみても風がつよく、筏をうかべた貯水池はたえずざ波立っていた。風は、木の香とどぶのにおいがした。そしてその風のなかには、目にみえない木の粉がどつきりとけこんでいて、それが慣れない人の目には焚火の煙のようにしみるのである。涙ぐんで、木場をあるいている人はよそ者だ。

私も、兄につれられて、はじめて木場をあるいたとき、泣いて、兄にわらわれた。私は、きょうだい、肩をならべてあるけるうれしさに、胸がはちきれそうだったが、それにもかかわらず目だけが泣いてくるのは、やはり風のせいであった。去年の春、三年ぶりに上京して、さいしよに木場をあるいた日にも、そのときはすでに兄は帰らぬ人になっていたが、私の胸はある怒りに燃えていたはずなのに、しきりに目だけがくもったのは、たしかに風のせいであった。私の目は、ついに木場の風になじまない、あるいは木場のなかでも、私がきまつてあるくコースにひとときわ木の粉が濃いのかもしれなかったが、私はもはや、それに慣れることをあきらめていた。

しかし、その日の木場は、いつもと様子がちがっていた。街のたたずまいが、へんに私にはよ

そよそしかった。木の山も、貯水池も、妙にまぶしいひかりを帯びて私の視線をはねかえし、木を裂く鋸のひびきもいっこうに耳になじまなかった。癖になった深川あるきで顔を見知った幾人かの人びと、煙草屋の婆さん、そば屋の出前持ち、軒をならべた製材所の門衛たち、トラックの運ちゃんたち、——私が兄に会えなくなった当座、すこしでも兄の最期がしりたくて、兄が遺した手帖を片手に訊ねまわる私を、みな刑事とまちがえて、あとで破顔一笑したそれらの気のいい人たちも、その日はなぜか、妙な目つきで私と志乃をじろじろながめ、かと思うとぶいとそっぽをむいたり、奇声をあげたりするのであった。そうして、風さえ私をよけて吹くのか、私の目は、いつまでも乾いたままなのである。

どうやら木場は、心のみちたりているときの私には無縁の街であるらしかった。

木場のはずれの、とある貯水池のふちに、私と志乃はならんで立った。風がまともから吹いてきて、水面にくだけた陽が、いちめんに、たえずちかちかとふるえていた。遠く、筏が、ふたつ三つうかんでいて、そのむこうに芥の野がしらじらとひろがり、えたいのしれない機械のひびきが、蛇の羽音のようにその方からきこえた。

「ここが、終点だ。ま、こんなところさ、木場ってところは。なんにもありやしない。」

私は水面に唾をしていった。

「いい風だわ。やっと深川へ帰った気持。」

志乃は、あつい日なかに、私にさえ無縁の街を右に左にひきまわされて、けれども、風に乱された髪の毛が汗の額や頬にはりついているちいさな顔を、無邪気に風になぶらせていた。

「帰ろうか。つまらんだろう。」

私は志乃をつれてきたことを後悔しながら、そういうと、志乃は、とんでもないというふうに頭をふった。

「せっかく、きたんじゃありませんか。もすこし、いましうよ。」

胸を抱くようにしてそこへしゃがむと、ぼつんといった。

「ここですか。」

「ああ。」と私はこたえた。

兄を最後にみた場所である。私の兄は高等工業の応用化学をでて、戦時中、海軍省の火薬研究所で魚雷をつくっていたが、戦後、どういう魂胆からか、この貯水池をもつ木材会社に入っていた。名刺をもらって、肩書を見ると、いきなり、専務というのであった。兄は、この会社で五年いた。その四年目に、私は東北の田舎の高等学校をでて上京し、兄の出資で大学へかよった。私は六人きょうだいの末っ子で、田舎の父はすでに衰えていたからである。しかし、兄には私がさして負担でもないらしかった。私は金が必要なとき、兄の会社へもらいにいって、兄はその都度、気やすく金をわたしてくれて、柳川鍋など食べさせてくれた。一年たって、三年前の春さき、しばらく会えなかった兄をひさしぶりに訪ねると、がらんとした事務室の火鉢に覆いかぶさっていた老人が、専務は席をはずしているが、多分貯水池にいるだろうといった。しんとした工場をぬけて、貯水池のふちへでてみると、春さきとはいえ、まだ冬のなごりのつめたい風が底まですきとおった水面にたえず皺をたたんでいるというのに、兄はひとり、鳶口をもって、けれどもべつ

だんそれを使うふうもなく、ただ筏から筏へと、せわしなくとび移っているのであった。上衣をぬいだワイシャツ姿が痛いほど目にあざやかで、なにかしら、どきつとした。思わず、大声で兄の名をよぶと、兄はあぶなつかしい恰好で立ちどまり、それからもつとも岸にちかい筏の方へ、ゆっくりと移りはじめた。私は、コンクリートの貯水池のふちを、その筏の先端とむきあう場所へ走ったけれども、私たちが水をへだててむかいあつた間隔は、十数メートルもあつたのである。兄は筏のへりにひよろりと立って、なんの用だと大声で問うので、私も大声で、ほかでもない、いつもの金の無心であつた。兄は大きくうなずいてみせて、事務所の机の引出に預金通帳と印鑑があるからもつていつて要るだけ使えといい、きょうはべつに用があるから後日また会おうといった。私たちは、しばらくのあいだ、なんとなく沈黙して互いをみつめあつていた。兄は西日を背にうけていつもより背が一段と高くみえ、その顔は落ちくぼんだ眼窩が黒々とした影をつくって、どくろに似ていた。わかれに、金の札をいうと、兄はその顔をぐしゃっと崩して、『あんまり、使うな。』そして、罵口を高くあげた。

それが、兄と私の別れになつた。

それから、三年。いまは持ち主のかわつたその貯水池が、志乃と私の目の前にあつた。

「お兄さんとは、それきりですか。」志乃がいった。

「それきりだ。」

「その後、お兄さんは。」

「死んだ。」

すらりと、いえた。その言葉は、子供のころから私の舌に慣れていた。姉ちゃん？ 死んだ。兄ちゃん？ 死んだ。よい言葉だと思った。死んだ。それきりである。あと、なにもいうことはない。なにもいわずにすむのである。

「さ、いこう。なに、ただの溜池さ。いつまでみてたつて仕様がないうよ。」

志乃をうながして、あるこうとすると、志乃はしゃがんだまま、水面にちいさく合掌して、ちみの衿もとからのぞいている、ほそい項の白さが目にしみた。私の靴音は、板木ばんぎをうちならすように、水面に高く反響した。

それから、洲崎へいった。

洲崎は、深川でも、私が足をはこんだことのない、唯一の土地であった。兄はそこへは案内してくれなかったのである。いちど、まだ兄の会社の社長一家が、焼けたされたまま志乃の母校の教室に仮住居していたころ、そこに寄食していた兄を訪ねて、いっしょに屋上から洲崎の街を遠望したことがある。

それは、異様な街であった。けばけばしい彩りのちいさな家々が、せまい路地をはさんでぎつしりと軒をつらねていて、家々の屋根という屋根、窓という窓には、赤や白の布ぎれがいつせいに風になびいていた。田舎者の私の目には、好奇をそそるながめであった。

「あの街へいきたい。」と私がいうと、「ばか。」と兄は叱って、そして、ほおっと頬を赤らめた。洲崎は、娼婦の街であった。

電車通りまででると、志乃に遠い記憶がよみがえった。志乃は、通りに、昔からある汁粉屋の

暖簾をみつけた。

「あ、わかったわ。もう、大丈夫です。」

胸の前で手をうちあわせると、私のさきに立つて横町へ折れた。道はゆるい勾配をのぼってすぐ運河につきあたり、運河には幅ひろい石の橋がかかっていた。橋をわたれば、洲崎であつた。

こちらがわの橋のたもとに、なにを売のかわからない屋台があり、立てまわした葦簀よしずのかげから、袴もとが大きくひらいたワンピースを着た顔色のわるい中年の女が、ぐつたりと長椅子にもたれて通りに目をほそめていた。

「これが、洲崎橋。」

志乃は、焰になめられたあとが黒い縞になつてのこつている石の欄干を、なつかしそうに手のひらでびたびたたたき、それから、橋のむこうの空をよぎっている高いアーチを、めずらしそうに仰いで、そこに書いてある、夜はネオンになるのだらう、豆電球にふちどられている文字を、

「洲・崎・パ・ラ・ダ・イ・ス」とひくく読んだ。

「パラダイスなんて、あたし、なんだかいやですわ。」

志乃は、上気したように頬を赤くしてそういうと、だまつてあるきだした。

志乃はすたすた橋をわたるのであつた。私は、ひとりでに胸の鼓動が高まつた。

私は、かつて娼婦の街をあるいたことがなかったのではない。それどころか、酒気を帯びれば友人を語らつてその街へまぎれこみ、安手の遊蕩気分をみたすことがしばしばであつた。けれども、真つ昼間、自分の想いをかけた女と、雨降りでもあるまいのに白い日傘の相合傘で、よもや